

キリスト教美術における天使の姿について

富永 裕子

清泉女学院大学

Engels and Cupids in Christian Art

TOMINAGA Yuko

Seisen Jogakuin College

1. はじめに

学生時代、「英語教育に携わるならば、必ず『聖書』を一度は読みなさい。その理念が英語に与えている影響は少なからずあるから」と指導教官がよく口にしていた。それから聖書を読んだかといえば、旧約聖書を読み始めたくらいで、結局は読んでいないというのが正直なところである。その後教壇に立ち、「なぜ世界にはこんなにたくさんの方の言語があるのか」という生徒の質問に、「バベルの塔」の話を例に出し多言語性について話をしたこともあるし、英語のディスコースにおけるハイ・コンテクストな側面を理解するうえで、その文化的背景にあるキリスト教の概念を説明することもあった。確かに学生時代に指導教官が述べていたことは嘘ではなかったと感じる。

私の専門は外国語教育であり学習者要因の研究をしている。学習者の文化的背景の違いが学習に影響を与えることは現在では明らかである。宗教の違いを含む文化比較をすることは、学習者要因の研究には欠かせないことであるが、宗教が与える文化的背景比較の研究はしたことはなく、キリスト教はもとより、キリスト教美術における知識は全くないのである。しかし、英語指導における教材研究

を通して、歴史的背景とともに存在するさまざまな美術作品を知り、さらに、その作品が伝える教義的メッセージを知ることにより、ギリシャ・ローマ神話にさかのぼり興味を持ち始めた。

特にキリスト教絵画のなかで興味をもったのは「翼」を持った人物像である。翼があるのは「天使」の姿であるというが、それがあの森永製菓のトレードマークのようなものばかりでなく、「受胎告知」の大天使ガブリエルのようなものもあれば、「キリスト教の試練」を表すドヴィッチョ・ディ・ブオニンセーニャの絵画にみる、黒い毛でおわれた「墮落天使」もある。

また初歩的なことだが、天使とクピド（キューピッド）の違いも改めて知る機会となった。本稿では天使の姿とその役割について、概要的ではあるができるかぎり考察していきたい。

2. 天使とは何か

西洋美術読解辞典（1988 河出書房新社）では、天使とクピドについて次のように述べている。

天使： 神の使者。神に代わって神意を地上に伝え、実行する者。

クピド： 愛の神。（中略）物語のなかで役割を持たずとも、ただ主題が愛にかかわることを想起させるために登場する。

天使は、少なくともルネッサンス頃までは聖書の物語や宗教的な教え・教訓などをモチーフにしたものが多く、天使はたいてい翼のある光輝く神の使者として表現されていた。語源は、ギリシャ語で使者・伝令を意味する「アンゲロス」からきており、聖書ヘブライ語では「マラク」にあたるといわれている。

美術の世界では、彩色写本からモザイク画、イコン、壁画、祭壇画、祈祷用の物事などにいたるまで、芸術家や職人たちはこの世ならぬ繊細にして人々の心に訴える天使像を表現しようとした。伝達の手段 — 画像や彫像 — が優れていればいるほど、神の姿や神の愛が信心深い読み手や崇拜者のこころにはっきりと届いたから

である。

また天使は、神の意思を伝え実行する靈的存在だとされているので、男でも女でもない。形姿は女性的になる傾向があり、青年あるいはそれより若く、普通ゆったりとした衣をまとっている。初期キリスト教美術では、普通の若者の姿で描かれていた。しかし、古代のニケやヴィットーリア、つまり有翼の勝利の女神像からの影響で、翼のある天使がイメージされるようになったといわれている。

3. 天使像の背景

翼のあるものが最も盛んに描かれたのは、ギリシャ・ローマ時代だった。両方の文化には天使に良く似た神々やそれに近い存在が数多くみられる。

ギリシャ・ローマ世界の翼ある生き物には、ユダヤ教やキリスト教の天使たちがもつ靈的な意義や役割は全くなかった。天使が本来もつ靈的・神学的な概念を示す最古のものは、古代世界とはほとんど関係がなく、すべては旧約・新約聖書と結びついている。聖書の創世記の最初の1ページから黙示録の最後のページまで、名のあるなしを問わず天使の存在と役割がはっきりと書かれている。

キリスト教最古の天使像には不思議なことに翼がなかった。それは、ローマ、プリシラのカタコンベ（地下墓所）にある天使像で、3世紀後半のものとする。4世紀の末までは天使を見分ける方法はほとんどなく、天使が現れた場面で判断するしかなかった。それはおそらく天使を鑑賞することが天使崇拜につながることを恐れたからだろうといわれている。また、初期キリスト教会では、神や三位一体の神（父と子と精霊）の性質について議論することの方が、より重要な課題だった。

5世紀になると、ようやく翼と光背をもつ天使が描かれるようになった。それが今日まで続く天使像の原型である。初期の天使像は、古代世界の空を舞う神々、とりわけ翼をもつ勝利の女神ヴィクトリアを思い起こさせた。これら初期の有翼の天使たちは、美術作品を装飾する添え物として頻繁に登場したものの、聖書の物語に不可欠

の存在として、あるいは神と人間の仲介役として登場するのは中世ごろであった。

4. 天使の階級

キリスト教会が本格的に天使の問題に取り組んだとき、避けて通れないのが天使の階級であった。それに関して、新約聖書に二つの関係深い記述がある。

エペソ人への手紙 (1 : 21)

すべての支配、権威、権力、権勢の上に置き、また、この世ばかりでなく来るべき世においても唱えられる、あらゆる名の上におかれた

コロサイ人への手紙 (1 : 16)

万物は、天にあるものも他にあるものも、見えるものも見えてないものも位も主権も、支配も権威も、みな御子にあって造られた

また、旧約聖書のイザヤ書 (6 : 2-7) には、興味ある天使が登場する。それは神の玉座を取り囲む熾天使 (セラフィム) で、次のように書かれている。

おのおの6つの翼を持っていた。その2つをもって顔をおおい、2つをもって足をおおい、2つをもって飛びかけり

一方、預言者エゼキエルは、みずから見たという天界の生き物について話している。それは人、獅子、鷲の顔をもつ生き物で、智天使 (ケルビム) と火のついた車も含まれていた (10 : 1-22)。

5 世紀、ディオニュシス・アレオパギタは預言者たちの幻視や新約聖書における天使の記述を研究し、天使を階級別に分類し、それを『天上位階論』に著した。彼の著書が発表されて以来、天使の階級や天使の象徴・役割に関する議論が盛んに行なわれるようになったといわれている。(表 1 参照)

ディオニュシス・アレオパギタの『天上位階論』はルネッサンス時代まで、実際にはそれ以降も、天使の階級に関する重要な判断基準ではあったが、著述家の中にはそれとは異なる階級構成を唱える者もいた。

芸術家たちも天使の序列や象徴物を混同することがあったようだ。例えば、智天使と熾天使の翼の数が2つ、4つ、あるいは6つという図像は珍しくないし、ルネッサンス時代には、智天使がしばしば序列の低い装飾用のプットとして描かれている。

表1: デイオニュシス・アレオパギタの分類

第1の位階			第2の位階			第3の位階		
熾天使	智天使	坐天使	力天使	主天使	能天使	権天使	大天使	天使
助言者（カウンセラー）と呼ばれる。神を取り巻く天使たち。熾天使と智天使は神の玉座を守り、坐天使はその玉座を運ぶ役目。熾天使は6つの翼があり、赤い衣装を身に着けている。智天使の衣装は青、金色、あるいは瑠璃色で、本を手にはしていることもある。			天国を収める役目を持ち、統治者（ガヴァナー）、あるいは支配者（ルーラー）とも呼ばれている。彼らは権威を表す象徴物を持ち、人間の姿をしている。力天使と能天使は神の法律と神の国を守る役目柄、甲冑をつけている。主天使は冠をかぶっていることが多い。			使者（メッセンジャー）と呼ばれ、天使と大天使は頻繁に人間と交流する。権天使はこの世の支配者と王国を守る天使である。聖ミカエルは大天使の長で、鎧をつけ剣や盾あるいは槍を持つ姿は、黙示録に書かれているように、神の軍隊の統率者・戦う教会の守護者としての役割を物語る。		

5. 天使の姿と役割

天使には、その階位に応じそれぞれの役割があった。ここでは、主に3つに分類し、それぞれについて述べる。

5.1 守護天使と告知天使

聖ヨハネの福音書の冒頭部分に「始めに言葉があった。言葉は神

と共にあった。言葉は神であった」とある。この「神の言葉」を世に広めることがイエスとその使徒たちの使命だったが、そのためには神の言葉を人間に届ける天使は、なくてはならない存在だった。天使はこの世で神の命令を実行し、神の言葉を人間に運ぶ任務をもつ。天使が伝えるお告げは衝撃的で、受け取り手に神の恩寵をもたらすとされた。

神のしもべとしてそのお告げを人間に伝える天使の重要性を考えれば、西洋美術に天使を主題としたものが非常に多いのもうなずける。中でも「受胎告知」のガブリエルによってもたらされる伝言は、キリストの誕生を予告し、それによってキリスト物語が始まるだけに最も重要な意味を持っていた。そのためか、西洋絵画には「受胎告知」の場面が多くみられるように思う。

天使は、人格を備えた存在でもあり、神に代わって人間のために行動する。守護天使は神が人間に与えた選択の自由を取り消すことはできないし、人間の悪しき行為が引き起こす結果をくい止めることもできない。その意味で、天使と神と人間をつなぐ鎖の一部といえる。代表的な天使は、大天使ガブリエルが挙げられる。またラファエルは巡礼するキリスト教徒に生涯連れそう守護天使の典型である。

5.2 正義と審判の天使

65年頃、マタイはキリストの再臨とそれにともなっていくなされるという最後の審判について書き記している。多くのキリスト教徒はキリストの再臨が第一千年紀の終りにおきると信じていた。それが起きなかったとき、最後の審判、神の正義、サタンへの敗北は芸術にとって格好の主題となり、絵画だけでなく教会の装飾として壁画、フレスコ画、大聖堂の石造物などに盛んに用いられた。それらの作品はシャルドンの壁画（12世紀）のようなシンプルなものから、フラ・アンジェリコの精緻な「最後の審判」（1431）にいたるまで多岐にわたった。

最後の審判を描いた作品には、共通する要素がある。まず作品の中央に裁きを行なうキリスト（傷があらわにみえる）と使徒、聖人

たちがいる。旧約聖書に登場する人物が含まれることもある。キリストの右側には鍵を手にしたペテロと聖母マリア、左側には洗礼者ヨハネがいる。下の方で、蘇った使者たちが（多くは墓から）生者ととも裁きを受けようと立ち上がる。天使たちは神の使者・仲介者として、最後の審判で重要な役割を務める。聖カミエルは魂をはかる天使として必ず登場する。甲冑をつけ、シンボルの剣や盾、あるいは槍をもつ姿は、黙示録に示された天軍の統率者・戦闘の教会の守護聖人としての彼の役割を物語っている。最後の審判の場面で、ミカエルは画面中央に描かれる。天秤を持っているのでよく分かる。彼はこの秤で天国に行く魂と地獄に落ちる魂とをより分ける。悪魔が登場し、秤をひっくり返して少しでも多くの魂を地獄に落とそうとする光景もみられる。

生者と蘇った死者が裁きを受けたあと、天国か地獄にいく姿も描かれる。地獄は壁画や絵画では画面下方、キリストの左側に描くのが典型的である。巨大海獣レビヤタンの口が地獄の入り口を表している絵もある。この入り口に向って罪人を追いやる天使たち、海獣の口の中で罪人を責め苛む悪魔たちを描いた絵もある。一方、天国は画面の左側（キリストの右側）に描かれる。公正な魂はそこで天使たちに迎えられる。庭を天国に見たてたり、雲を天国に見たてた絵画も多く残されている。

5.3 復讐の天使と死の天使

初期のキリスト教徒たちは、さまざまな迫害に耐えながら困難な時代に生きていた。そのことは1世紀末にかけて書かれた黙示録のなかにはっきりと表現されている。ローマ皇帝による激しい弾圧の中で、キリスト教徒たちは必死に布教活動をおこなった。彼らが心のよりどころとしたのは、キリストが再臨するとき、キリスト教徒は報われ、キリスト教徒の敵は裁きを受けて地獄へ落ちるといふ、黙示録に記された約束だった。

黙示録は、キリスト教の預言的な文学の集大成であり、その中で天使たちは神の怒りと正義の伝達者として頻繁に登場する。ラッパを吹き鳴らし、次々と災害を予告する7人の天使（第8章）から、

ひき臼のような石を海に投げ込む力強い天使（第18章）まで、驚くほど強靱で勇壮な天使たちは、墜落した人間たちに怒りのすべてを発散する。黙示録の鮮烈な象徴表現を写実的な描写は、芸術家の創造意欲をかきたて、さまざまな分野に黙示録の場面を表出させた。そうした傾向は特に中世初期から顕著になった。

ヨハネの黙示録には、ダニエル書やヨエル書のようなユダヤ教の黙示的な書物の影響がみられる。「旧約聖書」では、神はしばしばイスラエルの敵に直接立ち向かう（ダニエル書）。しかし、死や破滅をもたらす仲介者としての天使には、アッシリア人を撃ち殺す復讐の天使や（列王記下 19 : 35）、エジプトにいる長子を皆殺しにする死の天使（出エジプト記 12 : 12）が含まれる。

14世紀のヨーロッパでは、世紀末から蔓延した疫病によって人口が激減し、死の天使が新たに姿を変えて現れた。それは長柄の草刈り鎌を手に、次々に人をなぎ倒す冷酷な死の天使だった。人間はみな死をまぬがれないことを教訓としていた。

6. おわりに

キリスト教美術は神を讃えるだけでなく、キリストや聖人にまつわる出来事や事件を物語り、神の教えや知恵を解き明かす美術でもある。「見る」と同時に「読む」美術ともいえるが、識字率の極めて低かった中世になって、キリスト教美術はいわば目で見る聖書、聖人伝であったということである。教会に飾られた絵画や彫刻は聖書の世界を文字通りヴィジュアルに、生き生きと再現したが、その際、作品の意味、メッセージを伝える手段となるのが持ち物や目印である。虹が神と人間の和解、信頼関係の百合がマリアのシンボルであるなどというのは共通の理解、一種の約束事であるが、このように作品の意味や内容を探り、深く知る作業もキリスト教美術の理解には不可欠の要素となっていることを強く感じる。

今回は天使を取り上げ調べてみたが、翼ひとつに関してもいろいろな定義があり、また、天使の階位にあわせた持ち物や衣服とその色、そしてさまざまな姿が何を物語っているのかを垣間見ることが

できた。

単なる教義の説明でもなく、聖書の図解でもない、人間ドラマとしてのキリスト教美術は、信仰の有無にかかわらず強く訴えるものがあり、今後さらなる興味・関心を覚え、そこにある意義を見出しつつ、キリスト教美術を見て（読んで）いきたい。次は、光輪について調べることにより、より聖書に近づきたいと考えている。

<参考文献>

- ジェイムズ・ホール、高階秀爾監修（1988）「西洋美術解説事典」東京：河出書房新社
高階秀爾監修（1990）「西洋美術史」東京：美術出版社
世界美術大全集（1997）東京：小学館
宝木範義監修（2000）「西洋美術」東京：東京美術
千足伸行監修（2005）「キリスト教絵画の見かた」東京：東京美術
ローラ・ウォード／ウィル・スティーブズ著（小林純子訳）（2005）「天使の姿」東京：新紀元社